

## 研究課題：久米民十郎研究のための一次資料調査と学際的ネットワークの設営

本研究の目的は2つあり、(1)久米民十郎研究のための一次資料の所在を確認し、(2)それらを隣接分野の研究成果と照合し今度の研究発展のための方向性を定めることであった。

(1)に関しては研究代表者（以下、赤井）と研究分担者（以下、真鍋）が、それぞれ神智学研究とアイルランド文学・アメリカ文学の分野の研究経験を通じての確保していた情報を相互参照し、遺漏の無いことを確認する作業によって、大方達成することができた。そもそも久米民十郎研究のための一次資料は数が極めて限定されており、美術作品の大半は神奈川県立近代美術館に収蔵済みであり、書簡や日記、雑記などが今後発見される可能性は、皆無ではないものの極めて少ない。

そこで重要となってくるのが(2)隣接分野での研究成果である。これを加えると久米に関する資料の数は増大する。というのも久米は画家としての経歴の上で特定の関係者と共同して行動することが甚だ多かったためである。これを単なる芸術家同士の交流として片付けることは出来ない。なぜなら日米欧を広く渡り歩いた久米の活動は、両大戦間の日本においては得意なものであるが、最初から特定のグローバル・ネットワークを活用したものであったと考えられるからである。それは具体的には日本郵船の航路であり、そのベースとなっているのが神智学協会の人的ネットワークであったと推測できる。そうした特定の関係者の中でもっとも注目すべきなのがブリンクリー兄妹の介在である。ブリンクリー兄妹の日欧における事績を精査すれば、久米の行動と動機がある程度明瞭になってくる。

ブリンクリー兄妹の事績に関しては志賀直哉研究で一定の成果があることが今回の研究で分かってきた。自伝小説を模した『大津順吉』では稲ブリンクリーをモデルとした人物が主人公の恋人として登場するし、志賀は実際、短期間であるが稲ブリンクリーと交際していたらしい。志賀の日記には兄ジャック・ブリンクリーがしばしば言及されており、この人物との交友がかなり長期間にわたって続いていたことが判明する。明治期に横浜で発刊されていた英字新聞 Japan Mail の主幹であった兄妹の父親フランシス・ブリンクリーの動向にも注目すべきなのが判明した。フランシス・ブリンクリーは日本政府の意向と資金的援助を受けて、側面的に日本社会の先進性を世界に発信する役割を請け負っており、かれの日本美術の蒐集と紹介は日本文化の完成度の高さや芸術的価値を欧米に知らしめる役割を担っていた。日本美術の代表的紹介者であるアーネスト・フェノロサがフランシス・ブリンクリーのコレクションの一部を受け継いでいるというのは、余り知られていないが重要な事実である。

また夢幻能の紹介者として久米の果たした役割に関しては、夢幻能の劇的様式を心霊主義の降霊会の期待感になぞらえ、両者の間に通底するものがあるのを指摘したのは、フェノロサに始まることが明らかになった。フェノロサの遺稿を受け継いだエズラ・パウンドはフェノロサのこの解釈を事前に知っており、その示唆を受けて W・B・イェイツが『鷹の井』（1916）を創作したことは先行研究でも指摘されていたが、能の知識と心霊主義の経験の両者を備え持つ久米がパウンドに協力することで、フェノロサに起源する特異な能理解がイェイツとパウンドの中で根深く定着したものととの仮定が成り立つ。

本研究の過程で、殊に公開研究会を開催することで可能となった隣接分野の研究者との情報の共有を介して今後学際的ネットワークを充実拡大し、久米民十郎研究を新しい方向へと発展させる可能性が生まれたと結論づけることができるだろう。

なお、本研究の成果は赤井により以下の機会で開催された。もしくは発表される予定である。

(1)「久米民十郎の再発見」神戸学院大学人文学会第21回研究会（2019年3月2日神戸学院大学）

(2)「久米民十郎研究のための一次資料調査と学際的ネットワークの設営」2018年度神戸学院大学研究推進費発表会（2019年4月20日神戸学院大学）

(3) “Who Sang Behind the Hawks Dance?” The Formation of Oriental Images in Yeats’ Play,” IASIL International 2019（2019年7月末日 Trinity College Dublin 予定）